

原 著

モーツァルトの《声楽のためのソルフェージュ Solfeggien für eine Singstimme K.393 (385b)》とオペラ《ドン・ジョヴァンニ Don Giovanni K.527》のドンナ・エルヴィラのアリア「あの恩知らずの人は私を裏切った Mi tradì quell'alma ingrata K.540c」

金谷 めぐみ*

＜要 旨＞

モーツァルト (Wolfgang Amadeus Mozart, 1756-1791) の《声楽のためのソルフェージュ Solfeggien für eine Singstimme K.393 (385b)》(以下、《ソルフェージュ》) の全5曲 (Solfeggio 1, -2, -3, -Fragment, および Esercizio per il canto) の読譜、歌唱、録音 (CD の作成) を行った。ドンナ・エルヴィラ (《ドン・ジョヴァンニ K.527》) のアリアを読譜し、そのオペラの演奏を録音した CD の聴取を行った。

《ソルフェージュ》の旋律とアリアの旋律との関係、すなわち、《ソルフェージュ》の旋律が、エルヴィラのアリアの中にどのように存在するかを検討した。

「ソルフェージュ3」と共通する旋律をエルヴィラのアリア「あの恩知らずの人は私を裏切った Mi tradì quell'alma ingrata K.540c」に見出した。このアリアはオペラ《罰せられた放蕩者またはドン・ジョヴァンニ Il dissoluto punito, ossia Il Don Giovanni K.527》のウィーン初演の際に、モーツァルトが歌手カヴァリエーリ (Caterina Cavalieri, 1755-1801) のために新しく追加した曲であった。

「ソルフェージュ3」と一致した旋律は、アリアの中で動機として反復され、各所に変奏された旋律として存在していた。

キーワード：ソルフェージュ、アリア、ドンナ・エルヴィラ、モーツァルト

1. はじめに

モーツァルト (Wolfgang Amadeus Mozart, 1756-1791) の《声楽のためのソルフェージュ Solfeggien für eine Singstimme K.393 (385b)》(以下、《ソルフェージュ》) は、5曲が収集されている¹⁾。ユニヴァーサル社から出版された楽譜『ソルフェージュと声楽練習 Solfeggien und Gesangsübungen K.-V.393』²⁾には「ソルフェージュ1 Solfeggio 1」、「ソルフェージュ2 Solfeggio 2」、「ソルフェージュ3 Solfeggio 3」、「ソルフェージュ - 断片 Solfeggio-Fragment」、「声楽練習 Esercizio per il canto」が収められている。この楽譜の序文を書いたスワロフスキー (Hans Swarowsky,

1899-1975)³⁾は、「このソルフェージュは、コンスタンツェ (《後宮からの逃走 K.384》)、コンテッサ (《フィガロの結婚 K.492》)、アンナおよびエルヴィラ (《ドン・ジョヴァンニ K.527》)、フィオルディリージョおよびドラベッラ (《コシ・ファン・トゥッテ K.588》)、夜の女王 (《魔笛 K.620》) を歌うのに必要なテクニックをすべて含んでいる」と記している。

筆者は、これまで《ソルフェージュ》全曲の読譜と歌唱を行い、《ソルフェージュ》の作曲と出版の経緯、他の声楽曲との関係について総説を報告した⁴⁾。次いで、《ソルフェージュ》以前に作曲されたモーツァルトのオペラアリアのなかで、オペラ《ルーチョ・シッラ K.135》のジェーニアのアリア「ああ、いとしい人の

* 西南女学院大学保健福祉学部福祉学科

怖ろしい危険を思うと Ah, se il crudel periglio」の旋律に《ソルフエージュ》の「断片 Fragment」の旋律が使われていることを報告した⁵⁾。続いて、「ソルフエージュ1」とコンスタンツェ（《後宮からの逃走 K.384》）のアリア「たとえどんな苦難が Martern aller Arten」のコロラトゥーラの関係と声楽上の意義について考察した⁶⁾。

これまで筆者は《ソルフエージュ》とモーツァルトのオペラの登場人物のアリアの旋律の関係について継続的に研究を行ってきたが、本稿では、《ソルフエージュ》の「ソルフエージュ3」とドンナ・エルヴィラ（《ドン・ジョヴァンニ K.527》）のアリア「あの恩知らずの人は私を裏切った Mi tradi quell'alma ingrata K.540c」に共通する旋律を見出したので、この旋律について報告する。

2. 研究の対象

本研究には、ユニヴァーサル社の楽譜『ソルフエージュと声楽練習 Solfeggien und Gesangsübungen K.-V.393』²⁾およびオペラ『罰せられた放蕩者またはドン・ジョヴァンニ Il dissoluto punito, ossia Il Don Giovanni K.527』（以下《ドン・ジョヴァンニ》）からドンナ・エルヴィラのアリア、第3曲「ああ、一体、誰なら教えてくれるの Ah chi mi dici mai」および第8曲「ああ、あの裏切り者から逃れなさい Ah fuggi il traditor」、第2幕のアリア第21b曲「あの恩知らずの人は私を裏切った Mi tradi quell'alma ingrata K.450c」の3曲の楽譜（ヴォーカルスコア）⁷⁾とCD⁸⁾に録音されたそれらの楽曲を研究の対象とした。

3. 研究の方法

モーツァルトの『ソルフエージュ』²⁾を読譜および演奏し、オペラ《ドン・ジョヴァンニ》からドンナ・エルヴィラのアリア第3曲「ああ、一体、誰なら教えてくれるの Ah chi mi dici mai」および第8曲「ああ、あの裏切り者から逃れなさい Ah fuggi il traditor」、第2幕のアリア第21b曲「あの恩知らずの人は私を裏切った Mi tradi quell'alma ingrata K.450c」を読譜し⁷⁾、そのオペラの演奏を録音したCD⁸⁾の聴取を行った。《ソルフエージュ》の旋律とア

リアの旋律との関係、すなわち、《ソルフエージュ》の旋律が、エルヴィラのアリアの中にどのように存在するかを調査検討した。

4. 結果

モーツァルトの《ソルフエージュ》とドンナ・エルヴィラのアリアの読譜⁷⁾とその演奏を録音したCD⁸⁾の聴取を行い、《ソルフエージュ》とエルヴィラのアリアの旋律を比較し、検討した。その結果、モーツァルトの《ソルフエージュ》の「ソルフエージュ3」の中にドンナ・エルヴィラのアリア第21b曲のアリア「あの恩知らずの人は私を裏切った Mi tradi quell'alma ingrata」と一致する旋律を見出した。

エルヴィラのアリア、第3曲「ああ、一体、誰なら教えてくれるの Ah chi mi dici mai」および第8曲「ああ、あの裏切り者から逃れなさい Ah fuggi il traditor」は、《ドン・ジョヴァンニ》のプラハ初演（1787）でエルヴィラ役を演じた歌手カテリーナ・ミチュェリ（Caterina Micelli, 生没年不詳, 1780-90に活動）が創唱した際に作曲された。一方、第21b曲アリア「あの恩知らずの人は私を裏切った Mi tradi quell'alma ingrata K.540c」は、ウィーン初演（1788）で、エルヴィラ役を歌ったカヴァリエーリ（Caterina Cavalieri, 1755-1801）のために、モーツァルトが新たに作曲し、第2幕の第10場と11場の間に挿入したレチタティーヴォ付きのアリアであった⁹⁾。この曲は《ドン・ジョヴァンニ》の楽譜⁷⁾の末尾に追加曲として収められており、このアリアの37小節と《ソルフエージュ》の「ソルフエージュ3」の18小節が同じ旋律であることが見出された（楽譜1）。

「ソルフエージュ3」とアリアに一致する旋律は、それぞれの曲の中で両者とも同じ音形で反復されていた（楽譜2）。

一致する旋律は、アリアの中で動機として用いられ、各所に変奏された旋律として存在していた（楽譜3）。

モーツァルトのソルフェージュ



楽譜1 「ソルフェージュ3」とエルヴィラのアリアに一致する旋律

上段：「ソルフェージュ3」²⁾ 18小節

下段：エルヴィラのアリア

「あの恩知らずの人は私を裏切った Mi tradi quell'alma ingrata K.540c」⁷⁾ 37小節



楽譜2 「ソルフェージュ3」とエルヴィラのアリアに一致する旋律の反復

上段：「ソルフェージュ3」²⁾ 35-36小節

下段：エルヴィラのアリア

「あの恩知らずの人は私を裏切った Mi tradi quell'alma ingrata K.540c」⁷⁾ 68-69小節



楽譜3 エルヴィラのアリア

「あの恩知らずの人は私を裏切った Mi tradi quell'alma ingrata K.540c」⁷⁾ 107-111小節

5. 考察

《ソルフェージュ》との関係が見出だされたオペラ《ドン・ジョヴァンニ》は、モーツァルトと台本作家ダ・ポンテ (Lorenzo Da Ponte, 1749-1838) との共作による第2作である。前作のオペラ《フィガロの結婚 K.492》(1786) がプラハで大成功したことで、モーツァルトは、プラハの劇場監督ボンディーニから、ウィーン皇帝の姪、大公女マリーア・テレージア (Maria Theresia, 1717-1780) が婚約者ザクセンの公子のもとへ行く旅の途中、プラハに滞在する記念として祝典オペラの作曲を依頼された。そこで《フィガロ

の結婚》の台本を手掛けた作家ダ・ポンテと再びコンビを組み、1787年の4月に台本を受け取り、5月には作曲に取り掛かった^{9), 10)}。

新作オペラの初演は10月14日に予定された。モーツァルトはオペラの大部分を仕上げ、10月1日に妻のコンスタンツェ (Constanze Mozart, 1762-1842) とともにウィーンを発ち、10月4日にプラハに到着した。しかし、新作オペラのための練習は進んでおらず、結局、上演に間に合わなかったため、代わりに前作の《フィガロの結婚》がモーツァルト自身の指揮によって上演され、大公女は新作オペラを観ることなしに当地を去った。新作オペラ《ドン・ジョヴァンニ》は1787

年10月29日にプラハ国民劇場（現スタヴォフスケー劇場）で初演され、《フィガロの結婚》を上回るほどの大成功を収めた。この成功はウィーン『地方通信』（プラハ劇場ニュース）にも報じられ、同年12月、モーツァルトは、皇帝ヨーゼフ二世（Joseph II., 在位：1765-1790）からグルック（Christoph Willibald von Gluck, 1714-1787）の後継者としてウィーン《皇王室宮廷音楽家》の称号が与えられ、ブルク劇場で《ドン・ジョヴァンニ》の上演を命じられた^{9), 10)}。

プラハ初演の翌年、1788年5月7日にウィーンで《ドン・ジョヴァンニ》は初演された。このときモーツァルトとダ・ポンテは、ウィーン初演用に台本を改作し、ウィーンの歌手の高い技量と要望に合わせて、アリアと重唱曲を追加した。このウィーン版で新たに書き加えられた曲のひとつが、エルヴィラの第21b曲のアリア「あの恩知らずの人は私を裏切った Mi tradi quell'alma ingrata K.540c」であった¹¹⁾。このアリアは、モーツァルトがプラハ初演でエルヴィラ役を創唱した歌手カテリーナ・ミチェッリに書いた短いアリア、第1幕の第3曲「ああ、一体、誰なら教えてくれるの Ah chi mi dici mai」と第8曲「ああ、あの裏切り者から逃れなさい Ah fuggi il traditor」の2曲に加えて、ウィーンでエルヴィラ役を歌った歌手カヴァリエーリのために新たに書いたアリアであった。

モーツァルトは《ドン・ジョヴァンニ》のウィーン初演においてカヴァリエーリの要求により、大規模で技巧的なエルヴィラのアリア「あの恩知らずの人は私を裏切った Mi tradi quell'alma ingrata K.540c」を書き加えた¹¹⁾。エルヴィラは、スペインの若い貴族ド

ン・ジョヴァンニに捨てられ、それでも彼を忘れることが出来ない女性である。このオペラの主人公ドン・ジョヴァンニは、3人の女性との恋愛事件と関わりながら、最後は地獄に落とされる。最初の女性は貴族で騎士長の娘ドンナ・アンナ、次は市民のドンナ・エルヴィラ、三人目は農民の娘ツェルリーナである。情が深く強い女性エルヴィラは、ドン・ジョヴァンニに誘惑されたアンナとツェルリーナの運命も背負い、ドン・ジョヴァンニの敵対者となるが、心の底ではジョヴァンニのことを愛している。このアリアでは、ドン・ジョヴァンニがあまりにも不道徳、不品行である事を知ったエルヴィラが、彼を呪い、自分の愚かさ、哀れさを感じて苦しい心中を吐露する。そして彼を人でなしと言いつつも心の隅で愛しているという矛盾した気持ちを、心を動揺させつつ歌う。この複雑な感情を持つ女性は、モーツァルトのオペラ《ドン・ジョヴァンニ》の女性役のなかでも最も表現力および演技力のある歌手に歌われるべきであると云われる¹²⁾。

アリア「あの恩知らずの人は私を裏切った Mi tradi quell'alma ingrata K.540c」は、A一つなぎ部分 I—A一つなぎ部分 II—A—終結部で構成される。すなわち、この構成はロンド形式（主題が同じ調で繰り返される間に異なる楽想が挿入される）で書かれており、Aは完全に同じ旋律を反復する。この反復するAの旋律の冒頭部分が「ソルフェージュ3」の旋律と一致した。つなぎ部分 I および II は、Aの冒頭の旋律が変化記号を伴い、コロラトゥーラの音形で変奏される。A部分を、楽譜4に示す。

Mi tra - - di quell' al - ma in - gra - ta, quell' al - ma in - gra - ta: in - fe -
 - li - ce, od - dio - ! mi - fa, in - fe li - ce, od - di - o! mi fa, in - fe -
 - li - - ce, od - di - o! od - - dio! mi fa.

楽譜4 エルヴィラのアリア

「あの恩知らずの人は私を裏切った Mi tradi quell'alma ingrata K.540c」⁷⁾の主題部A (37-51小節)

オペラ《ドン・ジョヴァンニ》のアリアの特色は、レチタティーヴォ（叙唱）の要素が強く、旋律は内面から迫りくる劇的な動力を生みだすと云われている¹³⁾。すなわち表現力の強い短い動機を変化多く使用すること、同音を繰り返しながリズムを変化させること、そして跳躍的進行である。エルヴィラのアリアの冒頭に書かれた短い旋律（楽譜1）が動機となってアリア全体に変化多く反復される点においては、「ソルフェージュ3」の旋律の一部が、アリアの旋律を特徴付けていると考えられる。

ソルフェージュが作曲された時期は、アーベルト¹⁴⁾によると1781-1785年の間と推定されている。すなわち、《ソルフェージュ》の後にエルヴィラのアリアが作曲されており、モーツァルトが「ソルフェージュ3」の旋律をエルヴィラのアリアに意図的に用いたのか、偶然この旋律が頭の中に浮かび上がってきたのかは、検索を行った手元の文献には記述を見出すことができなかった。モーツァルトは、当時流行した自作でないオペラの旋律を自作のアリアに借用し、これに手を加えてモーツァルト特有な旋律にしてしまうほど、旋律を自由自在に扱っていた¹⁵⁾。《ソルフェージュ》と《ドン・ジョヴァンニ》の作曲年が近いことから、モーツァルトの中に「ソルフェージュ3」の旋律はあったと思われる。この旋律がエルヴィラの高潔で気丈さ、また彼女の傷ついた心を表現するのに短く強い動機となって用いられたと思われる。また、エルヴィラを歌ったカヴァリエーリは優れた歌唱技術をもっており、《後宮からの逃走 K.384》(1782)のコンスタンツェの役は彼女の技量に合わせて書かれ、そのアリアの長大なコロラトゥーラが「ソルフェージュ1」を歌う技術と類似することは前論文に記した⁶⁾。彼女はスワロフスキーが序文に揚げた登場人物コンスタンツェ（《後宮からの逃走 K.384》）、コンテッサ（《フィガロの結婚 K.492》）、エルヴィラ（《ドン・ジョヴァンニ K.527》）を歌唱しており、これらの役の歌唱技術を習得するのに有用であるとされる《ソルフェージュ》には、彼女の影響も少なからずあったと推察される。

6. おわりに

本稿において、オペラ《ドン・ジョヴァンニ》の作曲および上演場所について、モーツァルトが特定の歌手により台本や曲を書き換えた経緯について記し、とくに、ウィーンでエルヴィラ役の歌手カヴァリエーリ

が歌ったアリア「あの恩知らずの人は私を裏切った Mi tradì quell'alma ingrata K.540c」の主題となる旋律に《ソルフェージュ》の「ソルフェージュ3」の旋律が用いられていたことを報告した。

謝辞

本論文を執筆するにあたり、御指導および御助言を賜りました植田浩司先生（元西南女学院大学保健福祉学部教授）に心より御礼申し上げます。莊智世恵先生（国立音楽大学名誉教授）には、長年に渡る声楽のご指導および貴重な御助言を賜り、深く感謝申し上げます。小野和人先生（元西南女学院大学人文学部教授）には、英文抄録の作成でご指導をいただき、感謝の意を表します。

参考文献

- 1) Köchel L R: *Chronologisch-thematisches Verzeichnis sämtlicher Tonwerke Wolfgang Amadé Mozarts*. 6. Aufl. bearb. von Giegling F, Weinmann A, Sievers G. pp.417-418, Breitkopf & Härtel. sole agents in U.S.A.: C. F. Peters Corp., New York, 1964
- 2) Mozart W A: *Solfeggien und Gesangsübungen K.-V.393*. 1956. Continuosatz von Eibner F, Herausgeben von Swarowski H. Universal Edition. Wien, 1956
- 3) Swarowski H: Mozart W A, *Solfeggien und Gesangsübungen K.-V.393*. 1956. Continuosatz von Eibner F, Herausgeben von Swarowski H. Universal Edition. Wien, 1956
- 4) 金谷めぐみ, 植田浩司: モーツァルトの《声楽のためのソルフェージュ Solfeggien für eine Singstimme K.393(385b)》～作曲、出版の経緯およびモーツァルトの他の声楽曲との関係. 西南女学院大学紀要 21:87-94, 2017
- 5) 金谷めぐみ: モーツァルトの《声楽のためのソルフェージュ Solfeggien für eine Singstimme K.393(385b)》の「断片 Fragment」とオペラ『ルーチョ・シッラ Lucio Silla K.135』のジェーニアのアリア. 西南女学院大学紀要 21:67-74, 2017
- 6) 金谷めぐみ, 植田浩司: モーツァルトの《声楽のためのソルフェージュ Solfeggien für eine Singstimme K.393(385b)》と《後宮からの逃走 Die Entführung

- aus dem Serail K. 384》におけるコンスタンツェのアリアの旋律の関係性と声楽上の意義．西南女学院大学紀要 23:29-36, 2019
- 7) Mozart W A : *Il dissoluto punito, ossia, Il Don Giovanni, dramma giocoso in due atti : KV 527* / W.A. Mozart ; libretto, Lorenzo Da Ponte ; deutsche Übersetzung von Walther Dürr ; Klavierauszug nach dem Urtext der Neuen Mozart-Ausgabe von Hans-Georg Kluge. Kassel, Bärenreiter, 2005
 - 8) MOZART W A : Don Giovanni. Il debrando D'Arcangelo · Luca Pisaroni, Diana Damrau · Joyce DiDonato, Rolando Villazón · Mojca Erdmann, Vocalensemble Rastatt. Mahler Chamber Orchestra, Yannick Nézet-Séguin. Int. Release, 2012
 - 9) 海老沢敏, 高橋英郎: モーツァルト書簡全集 VI. pp.419-457, 白水社. 東京, 2001
 - 10) 海老沢敏: モーツァルトの生涯. pp.453-474, 白水社. 東京, 1984
 - 11) Rehm W: *MOZART Don Giovanni*. Herausgegeben von Csampai A, Holland D. 竹内ふみ子, 藤本一子 訳: モーツァルトの《ドン・ジョヴァンニ》ふたつの稿ープラハ 1787 年とウィーン 1788 年ー. モーツァルト ドン・ジョヴァンニ 名作オペラボックス 21. pp.232-237, 音楽之友社. 東京, 1996
 - 12) Lert E: *MOZART Don Giovanni*. Herausgegeben von Csampai A, Holland D. 竹内ふみ子, 藤本一子 訳: モーツァルトの《ドン・ジョヴァンニ》における悲劇的アイロニー. モーツァルト ドン・ジョヴァンニ 名作オペラボックス 21. pp.285-291, 音楽之友社. 東京, 1996
 - 13) 渡辺護: モーツァルトの歌劇 解説と研究. pp.186-192, 音楽之友社. 東京, 1956
 - 14) Abert H: *W. A. MOZART*. Breitkopf & Hartel. Leipzig, 1923-4. Translated by Stewart Spenser edited by Cliff Eisen. p.699, Yale University Press. New Haven and London, 2007
 - 15) 渡辺護: モーツァルトの歌劇 解説と研究. p.331, 音楽之友社. 東京, 1956

Mozart's "Solfeggien für eine Singstimme K. 393" and
Donna Elvira's Aria in his Opera, "Don Giovanni K.527",
« Mi tradì quell'alma ingrata K. 540c »

Megumi Kanaya*

< Abstract >

The author completed the reading, singing, and recording of "Solfeggien für eine Singstimme K.393 (385b)" by Mozart (Wolfgang Amadeus Mozart, 1756-1791), including all five pieces of the "Solfeggien" (Solfeggio 1, -2, -3, Fragment and Esercizio per il canto). The author also read the vocal score of Donna Elvira's Aria in "Don Giovanni, K527" and listened attentively to a CD which recorded the performance of the opera.

Following that, the author examined the relationship between the melodies of the "Solfeggien" and the aria, or how the melody of the former exists in Elvira's Aria.

A common melody was found to exist in Elvira's Aria, "Mi tradì quell'alma ingrata K. 540c" and "Solfeggio 3". This aria was one newly added by Mozart for the singer Caterina Cavalieri (1755-1801) at the first performance of the opera "Il dissoluto punito, ossia Il Don Giovanni K.527" in Vienna.

This melody coincided with the one in "Solfeggio 3" and proved to be repeated as the motive in the aria and to exist in several other places as varied melodies.

Keywords: Solfeggien, aria, Donna Elvira, Mozart

* Department of Welfare, Faculty of Health and Welfare, Seinan Jo Gakuin University